

# JAAF 陸上競技研究紀要

公益財団法人日本陸上競技連盟  
ISSN1349-7596

**Bulletin of Studies  
in Athletics of JAAF  
Vol.9, 2013**



FOR ALL SPORTS OF JAPAN

# 「陸上競技研究紀要」

(Bulletin of Studies in Athletics of JAAF)

## 投稿規定

陸上競技研究紀要編集委員会

### 1. 投稿資格について

特に制限は設けない。

### 2. 投稿内容および種類について

投稿内容は陸上競技についての理論と実践に関するもので、内容に応じて、総説、原著、資料、指導法および指導記録の報告などに分類される。スタイルは和文、英文のどちらでもよい。

投稿論文には上記の投稿種別を明記し、英文のタイトル、著者、所属、総説および原著には要約（150語以内）をつける。

（注：何らかの理由で英文要約等の作成が困難な場合は、編集委員会にその旨をご相談ください）

### 3. 採否等について

原稿は査読を行い、査読結果をもとに採否および掲載順序の決定、校正などは編集委員会が行う。

### 4. 原稿の書き方について

原稿は原則として、ワードプロセッサで作成する。本文は、横42文字×縦38字で1頁とする。（1頁は約1600字、刷り上がり10頁以内、図表もその頁数に含む、すべて白黒にて作成）

英文は、A4サイズタイプ用紙を使用し、15枚以内を原則とする。

計量単位は、原則として国際単位系（m, kg, sec など）とする。

また、英文字および数字は半角とする。

### 5. 文献の書き方について

本文中の文献は、著者（発行年）という形式で表記する。

例）田中（1996）は —————

文献は、原則として、本文最後に著者名のABC順で記載する。書誌データの記載方法は、著者名（発行年）、論文名、誌名、巻（号）、ペー

ジの順とする。

例）吉原 礼，武田 理，小山宏之，阿江通良（2006）女子棒高跳選手の跳躍動作のバイオメカニクスの分析。陸上競技研究紀要，2：58-64.

伊藤 宏（1992）陸上競技の発育・発達。陸上競技指導教本—基礎理論編—。日本陸上競技連盟編，大修館書店，55-72.

同一著者，同発行年の文献を複数引用した場合は発行年の後に a, b, c をつける。

例）田中ら（1996 b）は，—————

### 6. 原稿の提出先

投稿原稿（本文，図表など）は，下記へ E-mail の添付資料として送付するとともに，プリントしたもの1部を郵送する。

〒163-0717

東京都新宿区西新宿 2-7-1

小田急第一生命ビル 17 階

日本陸上競技連盟

「陸上競技研究紀要」編集委員会宛

(Tel 03-5321-6580 Fax 03-5321-6591)

E-mail:kiyou@jaaf.or.jp

### 7. 原稿の締め切り

原稿の締め切りは特に設けず，随時受理し，査読を行う。

### 8. その他

本研究紀要に掲載された内容の著作権は公益財団法人日本陸上競技連盟に帰属する。

(2014年3月 改訂)

## あ い さ つ

公益財団法人日本陸上競技連盟  
専務理事 尾縣 貢

2020年東京オリンピック開催が決定しました。オリンピックは全世界の人々の祭典であるとともに、国の競技力を競う最高の舞台でもあります。チームジャパンには、6年という限られた時間の中で競技力の飛躍的な向上を図り、オリンピック本番に臨むことが求められています。

そのためには、加盟団体および協力団体が手を取り合ったオールジャパン体制の構築、そして本連盟の全専門委員会を挙げての取り組みが必要となってきます。後者の取り組みにおいては、科学委員会と医事委員会が競技力向上のための直接的なサポート役を担うこととなります。

両委員会は、これまでも競技力向上に関して多大なる貢献を果たしてきました。これまでの多岐にわたるサポートに加え、東京オリンピックに向けては、暑熱環境対策という極めて重要な取り組みが加わってきます。有望種目であるマラソンと競歩は、暑さを制した者がレースを制すると言えるでしょう。

もう一つ大切な課題として、「最大力」を発揮することへのサポートをあげることが出来ます。アスリートが持つポテンシャルを高めることとともに、本番で持てる力を最大限に発揮することが大切になってきます。日本選手は、「国際大会本番に弱い」という評価を耳にすることが多いのですが、それは否定できません。本番で最大力を発揮できない原因について検証し、その解決策を考えていくことは重要であると考えます。最大力を引き出すためのキーワードとして、“ピリオダイゼーション”“精神力”“オリンピック前のピーキング”をあげることが出来ます。

本紀要の内容の充実は、本連盟における医科学サポートの充実を意味するものだと考えます。多くの研究の成果を本紀要で公表し、それらを多くのコーチが活用することで、コーチングのレベルが高まることでしょう。ひいては、それがわが国の競技力向上につながっていくものと信じます。

# 陸上競技研究紀要

Bulletin of Studies in Athletics of JAAF

Vol.9 2013

## 目 次

### 【原著論文】

オリンピック・世界選手権代表選手における青少年期の競技レベル  
ー日本代表選手に対する軌跡調査ー

・・・・・・・・渡邊將司ほか・・・ 1

### 【特集企画 - いま再び、ピリオダイゼーションを問う -】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

### 【日本陸連科学委員会研究報告 第12巻(2013) 陸上競技の医科学サポート研究 REPORT2012】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45

### 【エキサイティング メディカル レポート】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 145

### 【大会視察・帯同報告】

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 157